

たかす開拓記念館講演会報告

北海道開拓を語る

講師：往明寺住職 仲谷俊明 氏

11月3日、毎週水曜日に行われている、「たかす町民センターの日」「たかす開拓記念館の日」のうち、たかす開拓記念館行事として、17年前より北海道下川町の名願寺と交流されている仲谷氏にお願いして開催することができた。講演内容は以下のとおりである。

北海道には約150の市町村があり、それぞれ市町村史を作っている。その中には、それぞれ開拓の歴史が記載されている。ここで、下川町の古屋さんが書かれたことを中心に高鷲の北海道開拓について述べたいと思いますが、その前に、私が北海道開拓の歴史について述べたいと思います。



1：開拓の歴史

a、北海道開拓(明治2年～)、b樺太開拓(明治3年～4年)、c海外移民(明治元年～昭和30年)、d満蒙開拓(昭和6年～昭和20年)、e戦後開拓(昭和20年～平成28年)

2：北海道開拓

a、北海道の面積は九州と四国を合わせた面積を上回る。b、アイヌ語から北海道といった地名がついた。c、開拓以前の北海道の歴史。d、明治維新と北海道開拓使の設置。e、開拓の形態(監獄開拓、屯田兵開拓、移住開拓“士族移民、結社移民、募移民”)

3：移住

明治25年、北海道庁は、団体移住の奨励、貸付地予定存置制度、渡航船賃の割引、その他渡道保護等を積極的に行う「団結移住ニ関スル要項」を定め、府県からの小農民誘致、保護政策を積極的に進めた。その結果、1894～1898までの北海道移民を多く送出県は1位石川、2位富山、3位新潟、4位青森、5位福井の順であった。1905～1909年になると岐阜は11位となり、1919年まで続いた。

4：岐阜県内からの移住者

*屯田兵としての移住者は明治29年、鷲見より藤原米藏ら5戸が入植し、その後郡上から20戸が入植した。

*結社として移住は明治26年に「岐阜植民社」が、明治29年に「美濃開墾合資会社」が組織され、団体では「岐阜団体」、「大野団体」、「武儀団体」が組織され移住した。「郡上団体」では高鷲村の古屋達造を団長に上名寄原野(現下川町)へ明治34年に24戸51名、翌明治35年には北濃村の市村勘助を団長に26名、その内高鷲村鷲見から4名が参加



した。

*美並村では明治 30 年代に夕張へ、40 年代には土幌へ 3 名が、大正 5 年には上川・愛別・陸別・芽室町へ 11 名が移住している。

5：交通事情

明治 13 年札幌と手宮（小樽）の間に初めて汽車が走り、明治 15 年には幌内と手宮の間を汽車が走り出した。鉄道ははじめ開拓使がつくっていたが、炭鉱が開けていった明治 22 年頃には北海道炭礦鉄道会社や北海道鉄道会社が鉄道をつくるようになったが、明治 39 年になるとそれらが国有化された。

また、道路には駄通制度があり、旅をする人のために馬を貸したり日暮れになると泊めたりした。

6：開拓地までの道程

①事前調査（団体入植を志す者の多くは、縁者を通じて開拓地に入り、新規開拓地の情報を集めて現地入りし、移住計画を立てた上で郷里に戻り希望者を募る。）

②申請（希望者が集まり計画に合意がなされたら、村を通じて県庁へ申請し、移住許可が出されると、移住者の名簿と団体移住地存置願を現地植民派出所に提出する。）

③移動（明治 30 年鷲見村より移住した古屋達造氏の場合）

- ・高鷲より岐阜まで荷物を担いで徒歩で 2 泊 3 日、県庁で移住証明書を受け取る。
- ・鉄道で岐阜駅から青森駅まで約 1000 km、50 時間
- ・日本郵船連絡船で青森乗船、室蘭で上陸（230 km、船中泊）
- ・室蘭駅から旭川駅まで鉄道で移動（240 km、9 時間）
- ・旭川駅にて高鷲より送った荷物を受け取る。
- ・翌朝 8 時、駄通から馬籠で愛別へ、夕方当麻町伊香牛に到着。（21 km）
- 高鷲を出てから 9 日目（費用 20 円 20 銭、現在の 40 万円、距離 1500 km）

7：開拓風景

①開拓者の衣食住

入植者が危険を冒しての長い旅路の末、ようやくたどり着いた現地の多くは、昼なお暗い鬱蒼とした原生林であった。家は広さ約 10 坪から 15 坪の 1 棟 1 室の「拝み小屋」であった。入り口に箆を下げ、その 4 分 1 は作業場を兼ねた土間であった。

入植地は土地も比較的肥沃であったが、資金も乏しく馬や機械を買うわけにいかず、手作業によるしかなかった。開墾作業は春から秋までブヨ・カ・アブに悩まされ、防除対策としてぼろ布で火縄を作った。

②開拓者の悩み

*寒冷地の米作り：藤原次郎左衛門が高鷲開拓団に加わり、天候も味方し、上名寄でも米ができることを実証した。

*原野の教育：開拓地では入植当初は昼夜の仕事に追われ、子供の教育どころではなかったが、少し生活にゆとりが出てくると寺子屋式の教育を始めた。上名寄では明治 37 年春から学校建設が始まった。

（後略）



今回の講演会の参加者は約 30 名余で、仲谷先生の講演内容に時間を忘れるくらい熱心に聞き入っていた。北海道下川町はやはり高鷲村を母村とし、鷲見の地が心のふるさとであることがわかった。